

青少年活動センターのページ

ふれあい事業の拡充 26年度若者サポートステーションの新しい展開

平成18年度に全国25カ所でスタートした若者サポートステーション事業は、25年度に160カ所まで増えました。

ここで就労支援、特に無業状態にある若者のうち、非求職者への支援を行っています。総務省が行った最近の就業構造基本調査によると、京都市の15～39歳の若者の中には非求職者が38,700人いるといわれています。特に15～24歳では19,000人と、大阪市よりも多く、関西では一番多い地域となっています。京都では毎年サポステ利用者は増えてますが、対象人数が多くて、個別の相談だけでは支援が追いつかない状況です。

そこで、26年度は事業の様相を少し変えて、より就労に特化した集団プログラムの頻度を増やすことにしました。そのプログラムも“就活基礎力”と“就活実践力”の2つに分けました。

就活基礎力に関しては、就活における基礎的な能力を会話力、自己理解、主体性、課題解決、協働性、ストレス対応力、自己表現などに分けて、それぞれに対応するプログラムを行います。就活実践力に関しては、キャリアデザインに始まり、面接や履歴書講座、企業研究などを行います。これらを頻繁に行う事で、利用者の方は自分の現状にあわせて計画を立てることができ、課題を明確にすることで、達成感やモチベーションを上げることを目指しています。

これらを青少年活動センターと提携し共同作業で実施していきます。青少年活動センターはボランティアなどの集団活動や、グループワークなどを得意としており、連携は非常に有意義です。もちろんプログラムを通してセンターの利用者などと出会う事で、狭くなりがちな価値観を広げることにも可能だと思っています。

他には、農業体験だけだった中間的就労の場も、広げていけるよう模索します。働くことを学ぶには、やはり働く場で実感することが一番早いと思います。

もちろん、個別の相談に関しては、気持ちの整理を行う“こころの相談”、就職の方向性やテクニックを学ぶ“キャリアの相談”無業状態の若者の保護者を対象とした“保護者相談”は継続して行います。

これらは、若者の就労支援の一部分です。本人や家族だけに問題があるわけではなく、経済状況や企業の動向など、さまざまな要因が絡んできます。そのためにも関係者、特にサポーターの皆様や企業団体のご助力、ご援助をお願いしたいと思っています。特に働く場や職業体験の場を教えてください、提供して頂ければと考えています。

新年度も京都若者サポートステーションをよろしく申し上げます。

(京都若者サポートステーション 統括コーディネーター 松山 廉)

広がる支援の輪

『ひきこもり・不登校～家族や周りの人たちができること～』 講演会と交流会

子ども・若者支援室では、昨年12月7日、中京青少年活動センターで「ひきこもり・不登校～家族や周りの人たちができること～」と題して、講演会と交流会を実施しました。京都市のひきこもり人口は推計8,800人ともいわれています。当日は、京都市内外から10代～70代のひきこもり・不登校に悩む本人やその家族、支援者や関心のある方ら131人が集まり盛況でした。

存在をまるごと受けとめる大切さ

第1部の講演会では、立命館大学教授の高垣忠一郎さんが、ひきこもりや不登校の若者に対する理解と望ましい接し方について話されました。

高垣教授によると、不登校は1960年代より存在し、1970年代半ばから急増したそうです。教授は、この不登校現象は子どもたちが“自分を取り戻す作業”をしているのだといいます。自分を取り戻せずに学齢期を過ぎた若者が“ひきこもり”状態になることも多く、“不登校からひきこもりへ”といった流れを指摘します。教授は、不登校・ひきこもり現象の要因を“社会”に求めています。“教育をお金で買う社会”で不登校現象は増え続け、“企業が労働者として若者を抱え込む社会から、企業が即戦力として役に立たない若者を排除する社会（包接社会から排除社会）”へ移行する過程でひきこもり現象は増えているそうです。

教授によると、人間は2つの物差しを持ちえているとのこと。それは“自我（エゴ）”と“命（魂）”で、自我は社会で生きるために必要な部分、命は自分の存在そのものに必要な部分です。親には「親にとって」良い子が良い子でないかの目で見られ、社会に出れば「会社にとって」役に立つか立たないかの目で見られる。いわば“自我”が大事にされるのです。そのことで、子どもや若者たちは強い自己否定に苛まれるといいます。

不登校・ひきこもり状態にある子ども・若者は“自分が自分であって大丈夫”という“命”のレベルでの「自己肯定感」を持てるようになることが大事だと教授は指摘します。そのためには、評価ではなく存在まるごとを受け止める愛が必要で、彼らの家族自身が余計な手出しは控え、平和で穏やかな心で居ることが大切だと強調します。また、社会と接点を持つためにも、親の会や居場所活動など外部資源を積極的に活用するよう会場の参加者に呼びかけました。

交流会で繋がる支援の絆

第2部の交流会では、若者の社会参加を支援している団体の活動紹介を行い、参加者との交流を図りました。ブースへの出展団体は、今年度、NPO等民間団体の子ども・若者支援促進事業に採択された9団体です。ブースではそれぞれ団体の特色を生かした紹介が活発に行われました。参加者の大半を占めていたひきこもり・不登校状態にある当事者家族にとって資源と直接“繋がる”様子が見られました。また、当事者やその家族以外に、支援者同士の交流も生まれており、お互いに顔の見える関係で繋がることができ、不登校・ひきこもり支援の輪が広がる貴重な機会となりました。



(子ども・若者支援室 コーディネーター 繁澤 あゆみ)